

フォトクラシー（雑誌『Effetto Arte』のための記事）

夏。

自分の住まいを捨てて、どこか別の場所へ——どこでもいい場所へ——出かける季節。

芸術家もまた旅をする。ほかの逃亡者たちに混じって、核以後の脱出を眺めながら。

イタリアの美しい路地はどこもかしこも撮影現場だ。男も女も互いを撮り合い、怒鳴り合いながらポーズを取る。そうして生まれた画像は電話から旅立ち、別の人々の端末に届く。その人々もまた、異国の風景の前で親族を永遠化するのに忙しいのだろう。

この視覚的土産物の流通を追跡できたなら、われわれが見ず知らずの大勢の休暇の写真に偶然写り込んでいること、そしてわれわれの画像が、コールセンター職員の想像上の休暇を語るために使われていることが判明するだろう。

アルプスからピラミッドまで、瞬間の発作は誰にでも感染する。今日この場所に本当にいたという、証明済みの証拠を作らねばならない。今日、われわれが人生を満喫していることを、全員が知らねばならない。

われわれはデジタルの記憶を詰まらせ、ハードディスクを世俗の幸福の画像で満たす！

すべてはすでに少なくとも一度は撮影されていると確かにわかっていながら、それがわれわれによって撮られたのではないことは確かであり、それでわれわれには十分なのだ。

後世のため、歴史のため、未来のデジタルの記憶のために記録する。

共有のための仮想空間が生まれ、そこでわれわれは休暇の生活を画像で語れる。手柄を、征服を、一時停止した世界へのまなざしを。われわれは自分自身についての想像上の像を売っているのだ。

できるだけ多くの人に見せようとし、共有し、休暇の画像をまるで商品ののように売り込み、見知らぬ人を魅了してフォロワーに変えようとする。われを愛する者はわれに従え。

私の幸福を、私の楽しみを、私の享楽を、私はあなたの一瞬の時間と引き換えに売る。「いいね」と、「よいですね」と、「お会いしたい」と言うのに必要な、あの一瞬と。

この、悪趣味きわまる視覚情報の膨大な流通から、何が残るのか。

何も残らない。

素晴らしいと思えた写真の大半を消すのは、ほかならぬわれわれ自身だ。この一枚では自分が太ったのがわかり、あの一枚では姪がピースの角を作っており、そしてこの一枚では、間抜けな芸術家が沈む太陽の前を横切っている。

ごくわずかな一部だけがSNSに残り、そこで世々かぎりなく、消えることなく残るだろう。アーメン。

十五分の名声というより、それは一生をかけて、自分がどうありたいか、どう生きたいか、他人からどう見られたいかを描写しつつづけることだ。

かつては、二十本のスライドマガジンの上映で友人や親族の生を蝕むことができた。もっとも大胆な者は休暇中にVHS形式のビデオを制作し、観光ガイドが読み上げる音声解説までつけた。今日では写真も記録映像も無料だ。民主主義と同じように。

誰もが撮り、撮影し、投票し、政党を作ることができる。そして実際にそうする。恥じることもなく、自分の教養や能力とはかかわりなく。

観察者たる芸術家は、状況を深く分析して悟る。この時代に景観を味わい、記念建造物を訪ねるには、四つの解決策しかない。

- A) その景観や建造物の写真をインターネットで探す。
- B) 朝五時に起きる——実行する者もいるが、芸術家はしない。怠惰すぎるからだ。
- C) バールへ行って上質なSF小説を読む。
- D) 北朝鮮に住む。

どうしたものかと思案しているあいだに、一人の娘が、自撮りをしている友人を撮っている。鐘が鳴りわたる。今日また一つの芸術が死に、写真家たちは、かつての無用で素晴らしい頑固者たちのエデンで、画家たちに追いついた。

写真という観念そのものを一から考え直す、若き処女が現れるだろうか。

摂理のごとき太陽の雨がデジタル世界を破壊し、写真家という芸術家に尊厳を返してくれるだろうか。

われわれはただ、こう確信して安堵すればよい——画像を保存しているデジタルの記憶は、四〇〇〇年の考古学者のもとへ無傷では届かない。だから歴史家たちは、われわれの時代をあらゆる時代のうちもっとも憐れむべきものとして烙印することができないのだ、と。

学校でわれわれは、埋もれた時代の胸を裂くような読み物や逸脱した幻視を無理に飲み込まれる。それはひとえに紙とパピルスの不死性のせいだ。反対にわれわれの時代は、不釣り合いなほど大量の無用な情報を生み出し、それは無意識のディープ・エコロジーの行為として自壊していく。

Luca Motolese · Siracusa 2017

motolese.com — 原文はイタリア語